

# 第1章 調査の目的と経過

## 1 特定研究「北部日本における文化交流」のねらい

### (1) 国立歴史民俗博物館の特定研究

国立歴史民俗博物館では、わが国の歴史と文化を解明するため、開館以来、歴史・民俗・考古および関連諸科学の研究者の協業によって、多くの共同研究を推進してきた。1985年からはじめられた特別研究（1989年から特定研究と改称）は、当面する重要な課題を選び、フィールドワークを中心に進める研究である。

これまでに「日本歴史における地域性の総合的研究」（1985－90年度）、「日本人の技術と生活に関する歴史的研究」（1987－92年度）が行われ、それぞれ成果があげられてきた。

これにひきつづき、1990年から1995年度にかけて総合課題「列島内諸文化の相互交流の研究」が設定された。これは列島内各地で生み出された特色ある社会と文化を、地域を越えた交流に焦点を当てることで浮き彫りにすることを目的としている。そしてこの作業を通じて複眼的な視点から列島史の再構築を行なおうとしたものである。具体的には関東・北方・南方の3地域がフィールドとして選ばれた。

関東地域については「鹿島香取に関する史的研究」（1990－91年度）、北方に関しては「北部日本における文化交流」（1991－93年度）が実施され、南方については「奄美・沖縄の文化とその展開」（1993－95年度）が進行中である。「北部日本における文化交流」は、このように総合課題である「列島内諸文化の相互交流の研究」の解明を担う研究チームのひとつとして阿部義平（考古学部 教授）を研究代表者として発足したのである。

### (2) 北部日本における文化交流の課題設定

日本列島に展開した歴史と文化は多様な地域性をもつだけでなく、北方・中央・南方などに区分される特色ある文化が相互に交流することで、今日に至る日本社会が形成された。このなかで、ふるく列島北部の歴史をつくり出していったのが、蝦夷と呼ばれた人びとを中心とした人間集団であった。

「北部日本における文化交流」の研究では、蝦夷文化の基盤形成と歴史を解明することを目的に、主に5つの課題が設定された。

- ① 蝦夷形成期の文化交流と基盤形成を示す統縄文期を中心とした諸遺跡の発掘調査。
- ② 古代から中世にかけての蝦夷地域における海運と権力形成を示す城館・港湾都市の発掘調査。

- ③ 続縄文期の交流を検証する出土遺物の産地分析。
- ④ 続縄文期の交流を示す遺跡基礎資料の集成。
- ⑤ 古代の蝦夷を中心とした北方交流史料集の作成。

共同研究員全員が集合する全体の研究会は年3回のペースで実施され、必要に応じて各テーマごとの集まりがもたれた。研究会全体の詳細ならびに各課題における論点や成果は、この後に刊行されるそれぞれの報告書に譲らざるを得ないが、このうち課題①については、阿部を中心に1991年度に秋田県寒川遺跡、1992年度に宮城県木戸脇裏遺跡と秋田県田久保下遺跡、1993年度に青森県森ヶ沢遺跡の発掘調査を行った。これらの調査に関してはすでに成果の小報告や概要報告を刊行している〔阿部 1992・1993・1994〕。

課題②については、1990年に小島・千田・前川による予備踏査を行い、同年度末に研究代表者の阿部によって市浦村教育委員会をはじめとした関係機関へ調査の協力要請を行った上、1991年度から93年度にかけて青森県北津軽郡市浦村の福島城跡、十三湊遺跡の発掘調査を軸とした総合調査を行った。本書はその正報告である。研究会では毎回、共同研究員およびゲストスピーカーによる北の中世に関わる報告がなされ、討議が行われた。また92年度の福島城跡・十三湊遺跡の発掘期間中には共同研究員による現地研究会を行った。

さらに93年度には福島城跡・十三湊遺跡の調査成果を軸に、古代・中世の北方社会をさぐるシンポジウムを第14回歴博フォーラム「遺跡にさぐる北日本—中世都市十三湊と安藤氏—」として開催することができた。全国からの900名近い参加者を得て、当日は熱気あふれるシンポジウムが実現した。またフォーラム開催に合わせた前日に、市浦村・市浦村教育委員会の主催で関係遺跡の見学会が行われ、出土遺物の展示も行われた。各研究会・フォーラムでの発表テーマ等についての詳細は本書末尾を参照されたい。

## 2 十三湊遺跡・福島城跡調査の目的と課題

### (1) 北海道と東北北部の概観

南北に長く伸びた列島によって構成されたわが国の文化と歴史は、それぞれの地域に固有の特色があり、それらは相互に影響しあい、また密接な交流を重ねながら形成されてきた。北海道・東北北部地域は、旧石器・縄文時代にはめぐまれた自然環境のなかで狩猟・採集を基盤とした社会であり、列島の中央部と同じ歩みを示した。日本の縄文時代は世界的にみてももっとも成熟した狩猟・採集文化に到達していた。近年明らかになった青森市三内丸山遺跡の調査成果にみられるように、東北北部地域はそうした縄文文化の中心であった。

しかし弥生時代以降、列島中央部の社会が稲作中心の農耕を基盤とした社会に移行していくに従い、北海道・東北北部地域は独自の方向に進んでいく。もとより青森県の垂柳遺跡にみられるように列島中央部とわずかな差で稲作がはじめられたこともわかってきている。そうした動きに

合わせて地域社会や地域間のつながりも変化していったが、稲作の有無だけによって縄文から弥生への変化を説くことはできないだろう。

北海道・東北北部の大地と海・河川は豊かな資源にめぐまれ、この地域に暮らした人びとは、そうした自然環境を活かして狩猟・採集を基盤とした社会を継承して、縄文文化を発展させていった。縄文文化のうち、道南から津軽海峡を挟んで東北北部にまで分布した恵山式土器は、縄文から弥生文化に関わりをもち、北海道北部に分布の中心があった江別式系土器は、しだいに東北地域に分布を広げ、列島中央部から広がってきた古墳文化と接触して北大式土器が形成された。

この時期には北大式土器が東北各地で使用されただけでなく、北海道の各地でも土師器や須恵器が使用され、相互の交流が活発に行われていたことが確認できる。さらに北大式土器には突厥文に代表されるようにサハリンの土器要素の影響も指摘されており、南との交流だけでなく、より北との交流をも見据えておく必要がある。

東北北部・北海道の古代から中世の土器文化の変遷を解いた三浦圭介氏の研究によると〔三浦1993〕、8世紀段階の東北北部と北海道は古代前期の「東北北部型土師器」を共に使用し、一体性が強い。ところが9世紀段階に入ると、東北北部は城柵設置域である東北南部と共通した土器様式を示すようになり、10世紀頃には五所川原での須恵器生産も開始された。これに対し北海道では9世紀の前葉に擦文土器を成立させていた。津軽海峡による文化の分断であり、人やものの交流も停滞したことが予測される。

しかし10世紀後半になると、北海道から津軽海峡を通じて擦文土器が東北北部に流入し、また東北北部からは五所川原須恵器が北海道一円に広く供給されるようになる。津軽海峡を挟んだ一体的な文化が本格的に形成されていったと考えられるのである。三浦氏はこれを独自の文化と主張する。

その特徴には、土師器杯の極端な減少、擦文土器の使用などの特徴的な土器文化、岩木川水系中下流域への稲作の進出、製鉄・製塩・漆器生産・窯業などの活発化が指摘される。さらに集落の立地や形態も大きな変化を遂げており、村落単位ごとに堀を巡らした防御集落や高地性集落が出現した。現在、秋田県から北海道の渡島半島におよぶ範囲でこの時期の防御集落が発見されている。集落内からは鉄鏃などの武器が多く出土することからも、軍事的緊張の高さがうかがわれる。

こうした状況は11世紀末までつづくが、遠藤 巖氏のご教示によれば、10世紀から11世紀にかけては、まさに東北北部が国郡制に含み込まれる12世紀に向けて社会的な緊張が高まる時期に当たっており、近年急激に発見されつつある防御集落をそうした背景のもとに評価することが可能である。

そして12世紀代に入ると東北北部には広く鉄鍋・土師皿・木器を主体とした中世的な食膳用具の使用がはじまり、12世紀第3四半期にはそれに貿易陶磁や国内の陶器が加わった本格的な中世

食膳具の様式が確立した。これには12世紀以降日本海を中心とした全国的な海運網の発達によって、奥州藤原氏の建設都市平泉を拠点に、さまざまな人と物資が流通しはじめたことが背景として指摘できる。13世紀以降には貿易陶磁が大量に輸入され、東北北部の諸遺跡において食器組成の大きな比率を占めるようになった。

これに対して北海道では11世紀末頃には擦文土器文化は終焉し、12世紀には鉄器と木器を主体とした食膳具様式を独自に発展させていった。ここにあらためて北海道と東北北部は異なった道を歩み始めたのである。

そうした流れの中で、津軽平野の北端十三湖岸の丘陵上に一辺1 km三方という壮大な規模をもつ福島城が築かれ、さらには12世紀以降、日本海と十三湖に挟まれた砂洲の上に十三湊が成立していったのである。こうした流れの中に、両遺跡を位置づけ、評価することが必要であろう。

さらに城館では同時期の西日本のものと比較したとき、堀による囲郭がいち早く発達したことを指摘できる。柳之御所をはじめとした平泉の館や社寺は巨大な堀と土塁によって防御されており、15・16世紀代に顕著になった東北的な平地拠点城郭の構成の初源を見ることができる。こうした傾向は山城でも同様で、安藤氏との関連が指摘される青森市の尻八館などでは、多様な堀が確認されている〔尻八館調査委員会1981〕。これらの城館の発達史も従来、系統的に追求されておらず、北海道の館を含めた検討が必要である。

## (2) 福島城跡の調査

福島城は大規模な土塁をもつ巨大な城館遺跡として知られ、1955年には東京大学東洋文化研究所によって外郭部の部分的な発掘調査が行われている〔江上 ほか1958〕。そこで明らかにされた主な特徴をまとめれば、次のようになる。

- ・十三湖に面した台地上に立地し、一辺約1 kmの三角形、625,000㎡の規模をもった。
- ・外郭と内郭の2つの大きなまとまりからつくられた。
- ・外郭は東の台地つづきを切断するため、上端幅約12m、現況深さ約3 mの堀と基底部幅約15 m、高さ3～4 mの土塁を備えた。
- ・内郭は一辺200m弱の規模で、土塁と堀に区画されている。
- ・外郭の東辺土塁には門跡があり、古代城柵に類似した柵列が存在した。
- ・城域内には多数の竪穴住居址および井戸跡があり、遺物から住居址の年代は平安時代後期頃と推定される。

およそ以上であるが、遺跡の位置づけとしては、「東北地方・北海道に特有な館・チャンの一類型」とし、また年代についても、安倍氏・安藤氏の城という所伝に従って、南北朝～室町ころのものとしている。

しかし、中世城館の実態が明らかにされてきた今日からみると、こうした特徴をもつこの遺跡は、中世城館としてはあまりに異質であるといわざるを得ない。15世紀段階の北海道のチャンは

自然地形を利用し、円弧を描いた堀によって守られた単郭あるいは複郭程度の単純な構造で、規模もほとんどのものは長辺100m以内におさまった。チャシと福島城跡との差は歴然としている。

さらに根室地域などもっとも発達したチャシ築造の実年代は、アイヌの人びとと松前藩の戦いが激化した寛政元年（1789）のクナシリ・メナシの乱段階に下ることが確実に福島城と比較の対象にはならない〔村田 1990〕。確実に15世紀代の中世段階に遡る汐泊チャシ（函館市）では丘頂に丸く堀をめぐらした単郭で〔千田 1990〕、規模・構造とも福島城との共通性は認められない。

中世東北の館と福島城との共通性はどうかであろう。東北部地域の典型的な中世拠点城郭は、横堀と切岸によって防御され、相互の独立性が高い並立的な曲輪の集合体として城域がつくられた。そして曲輪内部は単体もしくは複数の屋敷地として使用され、いわゆる西日本における城下の構成要素が城内に含み込まれていた。こうした特徴的な構成を筆者は東北館屋敷型城郭と仮称している〔千田 1990〕。青森県八戸市の根城や浪岡町の浪岡城はその典型例である。

並立的な構成という特徴は築城主体の家臣把握の緩やかさに起因したと考えられ、権力のあり方に対応して列島各地にまだら状に見られるが、ことに東北と南九州に地域的まとまりがあり、顕著な分布が認められた〔千田 1994〕。これらを福島城と比較した場合、いくつかの完結した館が密接に集合してひとつの城を構成したという形態になっておらず、やはり、中世東北における館の一形態とすることはできないのである。

さらに先述したように、南北朝・室町期前半期にかけて活動したこの地域の山城は、15世紀第3四半期を下限とした尻八館を代表例に、曲輪削平の未熟さと対照的な、全国に先駆けた横堀や縦堀を斜面部に発達させていた。これらは福島城と同じように内部に自然地形を残すといった共通点はあるが、基本的な立地も規模も大きく異なり、福島城との比較にはもとより適さない。

このように福島城はチャシや東北地域の中世城館とは大きく異なったのである。それらの一類型とすることはできない。従来の評価は、年代や機能といった基本的な性格から再検討が求められる。たとえ、それがいかなる時代に構築されたにせよ、これだけ広大な城郭を築き得た築城主体の勢力は、東北地域全体にとってきわめて大きな存在であったといわなくてはならない。

くり返し指摘してきたように福島城の構成は中世城館としてはまことに異質であり、このことは築城年代が中世ではないことを強く示唆している。それは広大な空閑地を外郭域に含み込んだ福島城の、城としての空間構成にもっともよく示されているといえよう。別言すれば福島城の空間構成は中世人が城館として、取り込み利用しようとした空間意識とは異質な感覚であった。

そうした福島城の空間構成にもっとも近いものとしては、多賀城をはじめとした東北の城柵官衙をあげることができるだろう。もとより築地と土塁・堀の組み合わせといった違いはあるが、巨大な外郭と矩形の内郭（政庁）といった基本構成は驚くべき類似性をもつ。

従来、この遺跡が安藤氏の城跡であるとされているのも、この地に勢力をもった安藤氏の存在から類推されているにすぎない。東京大学東洋文化研究所の調査でも、実際に発見されている遺

物は10世紀から11世紀にかけてのものであった。文献上では勿論この地方に古代城柵的な存在は示されていないため、もしそうであるとすれば当然その性格が問題となるし、またそれが通説のように中世安藤氏の城館であるとすれば、中世城館の概念自体が再検討を迫られることになる。

また近世以降の築造の可能性は歴史的にみてまったく考えられない。一説に近世の牧とする見解もあるようだが、そのために幅15m、高さ3～4mといった大規模な土塁とその外側に幅10mを越える堀を1キロにもわたって造築したとは到底考えられない。

福島城を解明することが東北の歴史を考える上で、いかに重要な課題か明らかであろう。そして福島城の立地から築城主体は日本海・十三湖・岩木川水系による水運と密接に関わったことが想定される。これまで安藤氏の伝承に隠されて、本格的な検討が行われてこなかっただけに、遺跡からその性格の一端がつかめれば、解明に向けての糸口になる。

別言すれば、この壮大な城跡を北日本の歴史の中でどう位置づけられるかが問題である。いずれにしても、いったん予断を排し、遺跡そのものとしての実態を明らかにすることがまず必要である。またそれは、福島城の付近に存在し、それ故に安易に支城であったといった解釈がされてきた唐川城、墳館などの城館遺跡や、福島城を核とした配置の中で説かれてきた山王坊などの宗教遺跡の評価も変えていくことになるであろう。

それはさらに東北北部や北海道で近年急速に進みつつある城館遺跡の発掘調査とも合わせて、地域的特質や変遷などの問題とも関連した形で、様々な側面からの研究に寄与し得るものと思われる。

こうした福島城をめぐる諸課題に対応するために、まず城域内の徹底的な分布調査を実施した(91年度・第4章2)。そして今後の基礎資料として航空写真測量をベースに現地補測で修正した1/1000遺跡測量図を作成した(91年度・付図1)。さらにこれまで考古学的な調査が行われていないが、城内の中心と目される、福島城の通称「内郭」の堀と土塁の築造方法・形態・年代を明らかにするため、そこにトレンチを設定した(92年度・第4章3)。こうした一連の作業によって先述した諸課題解明の糸口をつかむことが今回の調査の目的である。

### (3) 十三湊遺跡の調査

十三湊は、中世における日本海交易の主要な港であり、ある時期、特に北方との関係では最も重要な存在であったと考えられる。一般には興国元年(1340・興国2年ともいう)の津波で壊滅したとする編纂物を根拠に、遺跡は存在しないと信じられてきた。しかし現地でも輸入陶磁器などの遺物が大量に採集され、またこれまで行われた学校建設や道路建設などに伴う部分的な発掘調査で、実は大量の遺物ときわめて良好な遺構の存在が確認されていた〔村越 1975, 市浦村教育委員会 1988〕。

1987・88年の市浦村による発掘調査は、後に詳述するように「古中道」・中世港湾都市十三湊の中軸街路に関わる調査であり、都市の骨格に関わるきわめて重要な部分の調査であったといえ

る。今日、刊行された調査報告書をもても、点々と開けられたすべての調査区に、整然と町屋が建ち並び、街区が伸びる様は壮観である。しかしこの成果は多くの注目を集めることなく、中軸街路と街区ファサードの上にはバイパス道が敷設されてしまった。

このように遺跡のごく一部が点的に中世の遺跡として認識されていても、全体がまとまりある都市遺跡として意識されることはなく、このため都市プランや個々の町割り、その変遷などは未解明のまま残されてきた。十三湊は遺物は出土するが、都市像は砂のベールに閉ざされた遺跡であった。

安藤氏を筆頭としたこの地域の政治勢力が十三湊と密接な関係をもっていたことは疑いない。十三湊遺跡の解明は、福島城をはじめとした近接した遺跡群の関係を明らかにし、地域の変遷史を描くといったことに留まらず、限られた文献史料から論じられてきた安藤氏や、日本海海運・北方世界交易の拠点港の実像をはじめ明らかにするものであり、北の中世の解明に大きく寄与する。

十三湊遺跡は広範囲におよぶ都市遺跡であり、3年間の調査計画では到底その全域を発掘することはできない。しかし、これまでみてきたように十三湊遺跡研究が大きく前進できなかったのは、都市としての全体像の仮説的提示がなかったためといわざるを得ない。そこで、今回の調査では十三湊の都市プランの復原案を作成し、全体像を提示することを第1の目標とした。

都市の全体像を念頭におくことで、個々の調査地点の成果に留まらない、調査区外の諸資料の成果を加味した総合的な評価をすることが容易になり、逆に調査区内での発見の意味を、より深く探ることも可能になる。

この課題を達成するために、まず予測された都市域の徹底的な分布調査を行った(91年度・第4章2)。つぎにその成果を元に、もっとも遺跡が良好に残ると目された地点と、都市の基本プランに関わる土塁と中軸街路沿いの地点を選んだ小規模な発掘調査を実施した。これによって基本的な遺跡の層位や年代的な消長を確認した(92年度・第4章4, 5A, 6A)。またこれと合わせ、地元に残された関連文書の調査や聞き取り調査、航空写真や絵図・地籍図の判読を進めた(91年度～93年度・第3章)。

そうした作業の上に、土塁と堀に守られた北側地区の中心部の一角と、中軸街路に沿った典型的な町屋地区と想定された地点の2カ所について、許された調査計画で可能な限り広い面的な発掘調査を行った(93年度・第4章5B, 6B)。これによって都市構造の検証を行うとともに、細部の具体的な状況をつかみ、地区ごとの構成や年代などの特性と、古環境・寄生虫などの自然科学的情報を幅広く収集した(93年度・第5章)。

これと合わせて、十三公民館に保存されていた明治期の地籍図の本格的なトレース作業および関連近世絵図面の調査を実施した(93年度・第3章)。

以上が、本特定研究の調査対象の一つとして福島城と十三湊を選んだ主な理由と、調査の経緯である。実現を見る上では、地元市浦村・市浦村教育委員会のご好意とご協力があったことが大

きな要素であったことは銘記しておきたい。なお、報告書に向けた作業は、主要な発掘参加者であった千田・小島・高橋・宇野・前川の協議によって構成を決め、基礎的な遺物および図面の整理は宇野・前川の指導のもと富山大学考古学研究室で行った。執筆分担は章もしくは節の末尾に明記したとおりである。

これまでに福島城跡・十三湊遺跡に関わる調査成果について、91年度の分布調査などについては概要報告を公表し〔千田ほか 1993〕、これ以外にもいくつかの報告を行っている〔千田 1993a・1993b・1993c, 小島ほか 1993, 宇野 1993など〕。また広く十三湊・福島城の歴史的な意義を問うた93年度の歴博フォーラムの成果も刊行された〔国立歴史民俗博物館 1994〕。

### 3 調査経過

#### (1) 年度別概要

第1年度(1991年度)は遺跡の全体像を把握するために福島城の1/1000実測図を作製し、10月11日から17日にかけて、福島城・十三湊遺跡の遺物分布調査などの現地調査を行った。

第2年度(1992年度)は十三湊の1/1000実測図作製に着手し、10月8日から18日に両遺跡の試掘調査を行った。また地籍図・絵図・文書史料の調査を実施した。

第3年度(1993年度)には、十三湊遺跡の測量図を完成させるとともに、前年度までの成果をもとに、7月21日から8月11日にかけて十三湊遺跡の発掘調査を行った。絵図・地籍図などの史料化も平行して進めた。

#### (2) 調査日誌抄録

以下、調査日誌の内容を抄録する。

##### 1991年度調査(10月11日～10月17日)

10/11 本隊市浦村到着、関係機関へ挨拶、打ち合わせ。

16日まで、福島城・十三湊遺跡詳細分布調査、分布図作成、遺物実測、写真撮影。

10/16 別働隊弘前市立図書館にて津軽家文書・絵図等調査。

10/17 関係機関へ挨拶、帰還。

##### 1992年度調査(10月8日～10月18日)

10/8 先発隊現地到着。打ち合わせ。

10/9 先発隊現地調査。富山大学考古学研究室チーム出発。

10/10 朝、コミュニティーセンターに全員集合、各班に分かれて作業開始。基準点・水準点の

移動。

十三湊遺跡第1・2地区：国土座標を基準にして5mごとのグリッドを設定。

十三湊遺跡第3地区：草刈りを行ったのち、重機による表土剥ぎを行う。

福島城：内郭縁部土塁に第1～第4トレンチの設定。内郭内の電気探査を開始。土塁の築上年代を把握するため断ち割り調査に着手。第1トレンチは現代の攪乱と判明。第4トレンチの平面プランで、土塁裾の大溝を検出。

10/11 十三湊遺跡第1地区：午前中にグリッド設定を完了する。午後からはグリッドごとにそれまでに出土していた遺物を取り上げる。また、遺物が出土した暗黒色砂層上面の遺構の有無を確認する為に精査を行う。その結果、



ピットを1つ検出する。

十三湊遺跡第2地区：土塁の築造年代と構造把握のため、まず土塁が切通し道に切られて調査が容易な部分（第1トレンチ）の試掘に着手。断面精査から版築状の構造を確認。全貌を明らかにするため、第1トレンチの東側の遺存状況良好な地点に第2トレンチを設定。本格的な断ち割り調査をはじめ。

十三湊遺跡第3地区：午前中は周囲の地形測量と平行して調査区の壁立てを行う。午後、黒褐色土層面の精査をする。

福島城：第4トレンチでは調査区を拡張した結果、大溝に伴う陸橋を確認した。各トレンチで調査区の壁立ておよび分層を行う。

- 10/12 十三湊遺跡第1地区：黒褐色砂層上面の遺構検出と図化を終了し、さらに一層下の茶褐色砂層上面を出しはじめる。調査区の東端から集石遺構・溝状遺構・ピットがみつきはじめ、調査区全域で多数のピット・土坑を検出する。この面が主要な生活面であった可能性が高まる。

十三湊遺跡第2地区：第1トレンチは壁を精査を続行し、分層に着手。第2トレンチは土塁の南北とも地山まで掘り下げ完了。土塁の立ち上がりを確認。

十三湊遺跡第3地区：調査区全域で砂質強で、表土や包含層の堆積も薄いことを確認。第1地区同様、茶褐色砂層上面から部分的にさらに下層の黄褐色砂層まで掘り下げた結果、ピットなど多数の遺構を検出。周辺の地形測量を引続き実施。

福島城：第3トレンチ南壁の写真撮影。第4トレンチでは陸橋部の上面を検出。遺構面の清掃後、写真撮影。

- 10/13 十三湊遺跡第1地区：昨日までの作業で茶褐色砂層上面できわめて多くの遺構が検出可能なが判明したが、遺跡の基本的な層序と構成を把握し、これより下の層から検出される遺構の有無を確認するため、今年度の調査では、茶褐色砂層下層の黄褐色砂層上面まで掘り下げることとを決定。作業を開始する。さらに調査区北壁に沿って深掘トレンチを入れ、より下層の層序を確認する。調査区中央

では炭化した柵上の遺構を発見。慎重に検出を行う。調査区北東部で検出されていた集石遺構の断ち割りもはじめる。

十三湊遺跡第2地区：第1トレンチと第2トレンチの南壁の分層を実施。セクション図を取りはじめる。平行して掘削が不充分だった第2トレンチ中央部の掘り下げを行う。

十三湊遺跡第3地区：地形測量図に等高線を入れる。調査区内の検出続行。調査区壁面と遺構検出面の精査を行い、午後一番で調査区の全景写真を撮影する。

福島城：第3トレンチを東側へ拡張し、土塁外側の堀の立ち上がりを確認する。堀の規模は上端幅4.9m、深さ1.3m。第4トレンチは、土塁内側裾の大溝断面セクション図が完成。平面図に着手。

- 10/14 十三湊遺跡第1地区：北壁と東壁のセクション図を取り、検出した遺構の平板測量図をつくりはじめる。合わせてピットの半載・炭化木の実測を始め、P32出土の紡錘車や骨片、集石遺構の写真撮影。

十三湊遺跡第2地区：第1トレンチの東壁と第2トレンチの南側西壁のセクション図をとる。第2トレンチ南側西壁で土塁の立ち上がりを確認する。第2トレンチ土塁中央部の掘削続行。

十三湊遺跡第3地区：遺構面の平面図を取る。ピット及び土坑の掘削。土坑から炭と人骨片を検出する。主な土坑の詳細写真の撮影。

福島城：内郭の遺構確認の調査のため、中央やや南側地点の電気探査にやや反応が見られた地点に第5・第6トレンチを設定。表土剥ぎを行い、遺構面を精査。結果、近年の耕作溝が反応したことを確認。つらいけど重要な成果。作業終了トレンチより順次埋め戻し。

- 10/15 十三湊遺跡第1地区：ピットの半載と観察、その後ピットの完掘を行う。

十三湊遺跡第2地区：第2トレンチの完掘後、西壁を精査し分層。さらに写真撮影。

十三湊遺跡第3地区：調査遺構平面図の作製。

福島城：各トレンチで図面作製完了。埋め戻し順調。第6トレンチ南西隅に直径約40cm

のピットを確認する。

10/16 十三湊遺跡第1地区：北東部の集石土坑の写真撮影。北壁・東壁のセクション図完成。焼けた板塀の実測図を取る。青森県埋蔵文化財調査センターのご厚意による樹脂で、木質保護の応急処置を行う。残ったピット・土坑の半截と写真撮影を行い、調査区の遺構平面図の作製を急ぐ。

十三湊遺跡第2地区：第2トレンチ土壘中央部のセクション図完成。第1トレンチはすべての作業が完了し埋め戻す。

十三湊遺跡第3地区：東壁と北壁のセクション図と平面図が完成。清掃後、完掘状況の写真撮影。埋め戻しに着手。

福島城：第4トレンチを土壘外側に拡張。予測通り門柱のピットを確認。第5トレンチで北壁のセクション図の作製。第6トレンチで北西部に土坑を確認。

10/17 すべての調査区で埋め戻しを行い、調査を終了する。夜、コミュニティーセンター大広間にて市浦村教育委員会主催によるお別れパーティー。なごりを惜しむ。

10/18 調査本隊帰還。

#### 1993年度発掘調査（7月23日～8月12日）

7/23 先発隊市浦村到着。調査準備。関係機関、個人への挨拶。

7/24 第1地区の除草。地表面から電気探査およびフラックスゲートによる探査。

7/25 座標および水準点の移動。各調査区周辺の地形測量。

第1地区：重機によって表土剥ぎを行う。調査区西壁にサブトレンチを入れ、地山面まで掘り下げ層位を確認。砂混り黒褐色土層面（中世遺構面）の上まで掘り下げ、壁立てを行う。包含層の浅い東側より検出を開始。

第2地区：地表面から電気およびフラックスゲートによる探査。農作物の移動。その後、重機による表土剥ぎをはじめ。遺構面まではひじょうに浅く、ただちに黒褐色土層面（中世遺構面）の精査にはいる。その結果、北西方向に伸びる溝1本、南北方向に伸びる溝3本を検出、さらに西側の南北溝に直交す

る溝を2本確認する。

7/26 第1地区：黒褐色土層面（中世遺構面）の精査を行い、多数のピット、土坑、井戸、溝状遺構、竪穴遺構を確認しはじめる。発掘区北側では東西方向に伸びる幅約2mほどの道路跡を検出。南北トレンチ部の西側南北方向にサブトレンチを入れて層位を確認した後、黒褐色土層面（中世遺構面）まで掘り下げる。

第2地区：黒褐色土層面（中世遺構面）の精査を行い、検出された遺構に番号をつける。精査後、検出状況の全景写真撮影。両調査区ともこの年の異常に強い季節風「やませ」による寒さと砂嵐に苦しむ。

7/27 第1地区：南北トレンチ部の黒褐色土層面（中世遺構面）の精査を行った結果、ピット、溝跡を確認する。また、発掘区中央部西壁に沿ってサブトレンチを設定。調査区北側検出の東西道路側溝の断面を確認。

第2地区：検出された遺構の半截を行い、平行して遺構概略図を作成。南北トレンチ部及び東西トレンチ部の写真撮影を行う。

7/28 第1地区：黒褐色土層面（中世遺構面）を清掃し、調査区の全体写真を撮影。南北トレンチの遺構の半截を始めるが、激しい降雨のため中止。

第2地区：調査をはじめますが、雨天のため作業を中止する。

7/29 第1地区：調査区全体の黒褐色土層面（中世遺構面）の清掃を行い、写真撮影。そのうち遺構の半截。また、SB04（焼失家屋）では炭化材及び住居の掘り肩を検出。

第2地区：引き続き遺構の半截作業を行う。遺構番号を付け、さらに層位名をつける。また、検出された井戸の底で曲物等の木製品を確認。

7/30 第1地区：昨日に引き続き遺構の半截を行う。SB04（焼失家屋）の炭化材の検出を行う。SE01は半截してから写真をとり、層位図を取る。東西トレンチ部の東半の写真撮影を行う。表土を取り除いた状態でふたたび電気探査を行う。

第2地区：引き続き遺構の半截を行う。適宜遺構断面の写真撮影を行い、層位図を取る。

- 7/31 第1地区：遺構の掘削を行う。南北トレンチのセクションの写真撮影。調査区に1m方眼を設定し、平面図の作成をはじめめる。
- 第2地区：引き続き遺構の半截を行う。土坑のセクション図を取り、写真撮影。
- 8/1 第1地区：午前中、雨天のため待機。午後、南北トレンチを清掃し、写真撮影。南北トレンチ北側のピットのセクション図、平面図を取り始める。
- 第2地区：午前中、雨のため待機。午後から掘削作業。また土色観察と土のサンプリングを行う。
- 8/2 第1地区：南北トレンチのセクション図を作成。SE01の井戸枠の検出を行う。
- 第2地区：掘削作業を終え、遺構面の清掃を行う。その後、青森県埋蔵文化財調査センターのご厚意で三内丸山遺跡のローリングタワーをお借りし、遺構の全景写真を撮影。
- 8/3～4 中休み。
- 8/5 第1地区：ピットのセクション図をとり、掘削作業を行う。北側と南北トレンチのセクション図を取る。北側道路の側溝を掘り上げる。SE01を完掘し、井戸枠プラン図を取って、曲物を取り上げる。
- 第2地区：調査区全体に1mごとの方眼を設定し、平面図を書き始める。また残りのピットを完掘し、井戸を掘り下げる。
- 8/6 第1地区：北壁・南壁・東壁のセクション図を取る。SB04〈焼失家屋〉の炭化材の実測図が完成。
- 第2地区：セクション図が完成する。引き続き平面図を取る。井戸の完掘状況の写真撮影。
- 午前、調査成果の記者発表。
- 8/7 第1地区：東西トレンチを除いて、ピットのセクション図が完成する。東西トレンチ、調査区西壁セクション図を作成する。SB03のエレベーション図を作成する。平面プランを作成する。
- 第2地区：平面図が完成し、レベル落としを行う。SE01から曲物が出土し、写真撮影を行う。
- 午後、調査結果の現地説明会を行う。多くの参加者を得る。
- 8/8 第1地区：井戸の写真撮影を行い、図面を作成。また、遺構から出土した土壌サンプルの洗浄。
- 第2地区：レベル落としを終える。井戸のエレベーション図を作成する。
- 8/9 第1地区：SE02のエレベーション図を作成する。南壁の写真撮影を行う。その後、レベル落とし。また、土壌サンプルの洗浄を行う。
- 第2地区：航空写真を撮るために、清掃を行ったが、強風のため、撮影は中止となる。レベル落としと図面の修正。
- 午前、歴博石井進館長来跡。午後、市浦村遺跡検討委員会（委員長村越潔弘前大学教授）開催、於市浦村コミュニティセンター。
- 8/10 第1地区：調査区全体の清掃を行い、航空写真を撮影する。レベル落としが終了する。土壌サンプルの洗浄を行う。調査作業が終了し、埋め戻しを行う。
- 第2地区：来年の調査のための杭打ち。埋め戻しに入る。
- 午後、遺跡調査報告会。石井進・小島・千田・宇野、於市浦村コミュニティセンター。夜、市浦村教育委員会主催によるパーティー。
- 8/11 埋め戻しの確認および復旧作業を完了して調査終了。
- 8/12 関係諸機関および個人へのあいさつ。

### (3) 調査・整理参加者

分布調査・発掘調査・整理作業参加者を以下に列挙する。所属はいずれも参加当時のものである。

千田嘉博・小島道裕・高橋照彦 (国立歴史民俗博物館)

宇野隆夫・前川 要 (富山大学)

佐藤智雄 (函館市教育委員会)・本堂寿一 (北上市立博物館)

亀井 聡・高橋浩二・野村祐一・片岡英子・河合君近・鈴木和子・浜木さおり・宮沢京子・  
角田隆志・大知正枝・小野木学・海道順子・榎原滋高・島崎久恵・中村大介・長谷川幸志・  
松田留美・松山温代・宮田 明・柳沼弥生・大野淳也・野川裕二・大泰司統・大高政史・大  
平愛子・尾野寺克実・河合 忍・佐藤聖子・武田昌明・中田書矢・野中由希子・福海貴子・  
松原和也・鶴松 普・石内詩保・稲石純子・岩崎誉尋・内田亜紀子・大川 進・大平奈央子・  
景山和也・近藤美紀・匂坂友秋・塩田明弘・滝寿美代・坪田聡子・古沢亜希子・堀内大介・  
三林健一・米出敬子・石井淳平・井手口恵美・田中慎太郎・田中幸生・中谷正和・古屋聡洋・  
松本 茂・山崎雅恵 (富山大学人文学部考古学専攻学生および大学院生)  
久保田睦子 (東北大学文学研究科博士前期課程学生)・工藤 忍 (立正大学文学部考古学専  
攻学生)・小林健司 (国学院大学大学院考古学専攻修士課程学生)

(千田嘉博：国立歴史民俗博物館考古研究部)

#### 参考文献

- 阿部義平 1992「秋田県能代市寒川遺跡の発掘調査」『歴博』第55号。  
— 1993「宮城県岩出山町木戸脇裏遺跡の調査」『歴博』第59号。  
— 1994『蝦夷の墓—森ヶ沢遺跡調査概要』国立歴史民俗博物館。  
宇野隆夫 1993「中世北日本の一大港湾都市」『百科年鑑1994』平凡社。  
江上波夫・関野 雄・櫻井清彦 1958『館址』東京大学東洋文化研究所。  
国立歴史民俗博物館編 1994『中世都市十三湊と安藤氏』新人物往来社。  
小島道裕 1993「十三湊と福島城について」『地方史研究』第244号。  
小島道裕・千田嘉博・高橋照彦 1993「青森県北津軽郡市浦村十三湊遺跡」『月刊文化財発掘出土情報』  
第131号。  
市浦村教育委員会 1988『琴湖岳遺跡—十三小学校線道路改良工事に係わる事前発掘調査』。  
千田嘉博 1993a「よみがえる中世の湊町」『歴史と地理』第162号，山川出版。  
— 1993b「よみがえる中世港湾都市」『読売新聞』9月3日夕刊。  
— 1993c「津軽の史都発掘」『イミダス1994』集英社。  
—・小島道裕・宇野隆夫・前川 要 1993「福島城・十三湊遺跡1991年度調査概報」『国立歴史民俗博  
物館研究報告』第48集。  
村越 潔 1975「十三琴湖岳遺跡」『日本考古学年報』第26号。